

## 鉄舟の襖



鉄舟の間に独り座しその夢を

我に託せし祖父母を偲べり

「欲しいものがあつたら、何でも持って行つて」

遺産相続の件が一応けりが着いたのだと電話で弟が言つた。このことについては私は全く蚊帳の外であつた。遺言だといふ書類を送つて来てあつた。母の遺志といふことであつたが、もう記憶もさだかでなかつた頃の母の遺志とは何たるうと思つていた。

私は長女で五人の弟妹がいるが、養子を取つて父の事業を継いだ妹が十五年前に他界していた。その養子や長男である弟、嫁くこともなく父母の世話をして来た画家の妹など複雑でもあり、私はひたすら黙認に徹して来た。弟妹たちを庇護して来た長女のプライドが弟妹と確執を起すことを拒んだ。

父が「何とか消さずに続けてくれ」と切望していた「全戦没者の慰霊」といふ父の半生を賭けた重い荷は、夫や三男と共に引き継いで頑張っている。

「鉄舟の書が欲しいわ」

私は率直に言つた。前々から土蔵にただ丸めて保存されていただけの屏風用の六枚の書を、我が家の襖にしたいと思つていた。

「いいよ、価値を認める人が持つていけばいいさ。直ぐ送らせるよ」

弟もあつさり答えた。外見は私の兄に見えるほど老けた弟の苦笑している顔が浮かんだ。長男の重圧が神経質の弟を苛んで来たのかもしれない。

四五日して信州の妹から宅急便が届いた。六本の仮軸に止められた鉄舟の書であつた。早速経師屋さんと呼ぶ。座敷に並べて広げると、流石鉄舟の書である。

「襖は勿体ないでしょう。屏風にしてはどうですか」

と経師屋さんも言つた。

昔強制疎開で壊された前の家の座敷に、何かあれば立てられていた一对の屏風があった。山水画の周囲は金箔で、見事だなあと子供心に眺めたものだったが、戦後建てられた家は八畳六畳が主で二度と屏風が立てられたことはなかった。そしてそれも人手に渡ってしまった

屏風は場所を必要とするし、品物となると保管も考えねばならない。襖は家の一部であるし、いつでも目に出ることが出来る。私はやはり襖にしてもらうことにした。

経師屋さんが抱えて帰って二週間が経ったある夕方巡査の訪問があった。近所にこそ泥が入ったと言った。

「この所 麓地区の盗難が多いんです」

若い巡査はうんざりした調子である。私は俄に預けた書が心配になった。火事ということもあるかもしれない。しかし夫に何を心配するのかと笑われてしまった。考えて見れば経師屋さんはこの校区の消防の分団長だった。

注文した縁の布がなかったとのことで再度サンプルを見て色柄を決めた。取り払われた襖に夜の寒さが身に沁みるようになったある朝、経師屋さんが意気揚々と運んで来た。

玄関の前の十畳間はコの字型に三面襖である。書の張られた中央の二枚は開くと両端の襖に隠れる。金糸色の布地も落ち着いた雰囲気で気に入った。

夜、全ての襖を閉じて独り座り、静かに眺めて見る。勢いよく曲がりくねった字は何が書いてあるのかさっぱり読めない。ただその清冽な気迫が私の心を洗い清めてくれるようだ。

そして眼を閉じれば、祖父母の愛情に包まれて過ごした幼い日々の思い出が彷彿として来るのだ。

同じ兄弟でも長幼の序がもたらす不公平はどうすることも出来ない。下の二人の弟妹は祖父母を全く知らないし、祖母の亡くなった時は弟も学齢に達していなかった。

初孫として特に祖母は私を可愛がってくれた。親戚の人の話では自慢の孫であったそうである。少し

て私が学齢になつた時、祖母は「貞子にも故郷が必要だ」と言つて、私一人を連れて東京から信州に戻つたのだつた。

その直前祖父は

「貞子に見せておかねばならない」

と言つて、東京の三方所を巡つた。皇居前にあつた楠木正成の銅像、乃木大将の家、泉岳寺の赤穂浪士の墓であつた。いずれも忠義に命を捨てた人だ。如何にも明治の人らしい選択である。

今ここに私は祖父の秘蔵の鉄舟の書に囲まれていゝる。それらの書が、

「ああ、やっと落ち着けたよ」

と語りかけて来るような気がする。そして祖母と父母の満足気な慈眼さえ感じる。

「世のためになる人間になれ」

というのが彼らの遺訓である。価値観もすっかり変わった今、厚い障壁に何度もめげそうな私だが、この書から凛々とした勇気を貰おうと思つている